■研究最前線

コミュニケーションの視点で人間関係や社会を研究　•Studying human relationships and society from a　communication perspective

世代や人種を超えた「対話」や「議論」を保つには

——相互理解のためのコミュニケーション学——

Maintaining "Dialogue" and "Debate" Across Different Cultures

—Communication Studies for Mutual Understanding—

◉外国語学部　田島 慎朗 准教授

• Faculty of Foreign Language Studies—— Associate Professor *Noriaki Tajima*

私たちが日々繰り返すコミュニケーション。それは家族や友人のような近しい相手ばかりではなく、時には利害が相反する相手との間にも欠かせない。外国語学部の田島慎朗准教授は、コミュニケーションの手法や影響を分析し、現代社会における人や集団、社会のかかわりで生まれる幅広いテーマを扱う学際的なコミュニケーション学の視点で、さまざまな社会的なテーマについて、現代社会での対話や相互理解の可能性を探る。

We communicate with close people like family members and friends in our daily life, but sometimes we also need to communicate with those whose interests conflict with ours. Associate Professor Noriaki Tajima of the Faculty of Foreign Language Studies interrogates public communication, exploring the possibilities of dialogue and mutual understanding in modern society from a communication studies perspective, in order to address a wide range of social themes arising from interactions among individuals, groups, and society.

■コミュニケーション学は社会を読み解く人文知

——コミュニケーション学に関心を持ったきっかけを教えてください。

高校生の時からアメリカ文学が好きで、学部も外国語学部英語学科に進みました。大学入学後はESS（English Speaking Society）に入部し、そこで大学対抗の英語ディベートに打ち込みました。そのうちに、説得力をもって相手に自身の考えを伝えるために、コミュニケーションの手法や影響だけではなく、コミュニケーション上での課題やそれが持つ可能性に触れ、だんだんとその魅力にのめり込んでいきました。当時は楽しく夢中でやっていましたが、今思い返すと単に負けず嫌いな性格だったのかな、とその時の自分を振り返ります。

▲ディベートキャンプで缶詰めで原稿を書く 26歳当時の田島准教授

When he was writing files at a debate camp (26 years old)

▲大学院時代ディベート大会の受付にて

At reception desk of a debate tournament

学部はアメリカ文学を専攻して、卒業論文はアメリカのある詩人に頻出するテーマをトピックに書きました。大学院はアメリカ合衆国に渡り、コミュニケーション学を専攻しました。コミュニケーション学の中でも、特にレトリック（修辞学）、弁論術、議論学、スピーチなどの分野を専門にしています。

留学中は大学院生として勉学に励みながら、ディベートクラブのアシスタントコーチとして学部生に指導や助言をする役割を担いました。このような仕事に就くと学費免除や生活費補助がもらえる仕組みを利用しました。帰国後は授業でディベートを教えたり、日本ディベート協会で日米交歓ディベートツアーのコーディネーターを担当し、教育ディベートを普及させる活動にも携わっています。

——コミュニケーション学はどんな学問ですか。

アメリカでのコミュニケーション学は、分野・領域としての成り立ちがかなりはっきりとしています。20世紀当初、当時の英米文学学会の年次集会で政治スピーチを分析しようとした発表が「洗練された文学のテキスト以外は学問の対象として扱うに値しない」という理由で締め出しをされ、1914年に独自の学問領域を切り開こうと学会を組織しました。これが今のアメリカにおけるコミュニケーション学の始まりとされています。そのため、この分野は当初から実利的な側面が強く、20世紀前半ぐらいまでの学部教育は政界や法曹界に進みたい学生等を対象としたリベラルアーツ・基礎教育という色合いが強いものでした。20世紀後半には一気にグローバル化が進んだアメリカ社会の動きを受け、異文化や組織内・組織間、対人関係、メディアといったさまざまな場面におけるコミュニケーションを研究の対象や教育のトピックにしていきました。したがって、社会心理学などの定量研究の手法をとる研究者も多くいます。また、フェミニズムや公民権運動の広がり、セクシャルマイノリティの権利の議論の活発化やヨーロッパにおける思想や理論の発達を受け、これらを取り込みながら発展してきました。よって、現在のコミュニケーション学は非常に学際的です。また、他の人文・社会科学分野の知見に柔軟に対応しようという姿勢が強いのも特徴です。

上記のような歴史をもつコミュニケーション学なので、私の専門の一つであるレトリック（修辞学）を「古代ギリシャの直接民主制からつながる討論文化の正統であり、アメリカのコミュニケーション学の起源だ」と理解する人もいます。しかし、私はレトリックをより汎用に、複雑な社会を読み解き、意味を与えてくれる人文知だと考えています。あぶりだされる意味が社会倫理的に問題があるものだったり学術的な議論を活発化するものだったりしたとき、私はコミュニケーション研究者としての意義を強く感じます。

同僚のアシスタントコーチと、チームのディベーターと▶

With an assistant coach and a debater

■Critical, cultural and rhetorical approach to communication

—— What sparked your interest in communication studies?

I have loved American literature since high school and continued this love by pursuing an undergraduate degree in English at the Faculty of Foreign Languages at my university. After entering university, I joined the English Speaking Society (ESS), where I joined intercollegiate English-speaking policy debate club. In the college and debate club, I fell in love with debate and was fascinated by the charm of communication, not only by its methods and impacts but also its challenges and possibilities. I simply enjoyed classes and debate activities back then, but now that I think back on it, I guess I was too competitive.

I majored in American literature as an undergraduate and wrote my thesis focusing on a recurring theme of an American poet. I then went to the United States for graduate school and majored in communication studies. Then, I focused on rhetoric, argumentation, and communication education.

When I was a graduate student, I also served as an graduate teaching assistant, or assistant coach for the debate club, providing guidance and advice to undergraduates. I did this job to take advantage of the university's system that offered tuition waivers and living stipends in exchange for the work. Since returning to Japan, I have taught debate in classes and coordinated Japan-U.S. exchange debate tours with the Japan Debate Association, contributing to the promotion of academic debate.

—— What is communication studies?

In the United States, the discipline of communication studies has a clear foundation. It began in the early 20th century when a proposal to analyze political speeches at the then Anglo-American Literary Society was rejected because texts outside of "sophisticated text" were deemed unworthy of academic conversations. This led to the organization of an academic society to establish a new academic field in 1914. This is considered to be the beginning of communication studies in America today. For this reason, from the time it began and until the mid-twentieth century, the field had a strong pragmatic orientation, with undergraduate education that was focused on liberal arts and basic education for students who wanted to go into politics or law. The latter half of the twentieth century has a different story for the discipline. In response to the rapidly increasing globalization of American society, the field expanded to include research and education on communication in a variety of contexts, such as intercultural, organizational, and interpersonal communication as well as media. As a result, many researchers in communication began using quantitative research methods. It has also evolved to include influences from the spread of feminism, civil rights movements, increased discussions on the rights of sexual minorities, as well as the development of ideas and theories in Europe, making contemporary communication studies highly interdisciplinary. The discipline is also characterized by a strong attitude to respond flexibly to insights from other fields of humanities and social sciences.

Because of this history, some people see one of my specialties, rhetoric, as "the orthodox," connected with the democratic and oratorical culture of ancient Greece and the origin of American communication studies. However, I think of rhetoric more broadly as a humanities discipline that helps us decode communication and gives meaning to our life. When the meanings that are revealed pose ethical dilemmas or stimulate academic debate, I find significant value in my role as a researcher in communication.

■研究最前線

■礼節を尊重しながら社会を発展させる

――最近の研究テーマについてお聞かせください。

かねてから、公共で行われる、多数の利害にかかわるコミュニケーションの諸相に興味がありました。最近は、世代や考え方が異なる者の間で社会の分断が進む中で、どのように対話を続け、建設的議論を実現していくかに関心があります。話してもムダだから対話することを拒否したり、難しい課題だから解決を諦めてしまったりすることは簡単ですが、公共に関わるものについては、モヤモヤを感じているなら、それを表現しないといけない。自身の意見を立場の異なる相手とぶつけ合い、一定の合意形成を進めていかなくてはいけないという思いが強くあります。この前提で公共のコミュニケーションを見てみると、この過程を見事に可能にしているものもあれば、それをひどく踏みにじったものもあります。どちらにせよ、この私の思いにかなうものについて、説得の概念や、社会関係・権力の理論を使って、学術的な議論を盛んにしたいと思っています。

最近注目してきた概念に、Civilityというものがあります。Civilityは礼節と訳されることがありますが、けっしてそれだけではありません。この言葉はラテン語の*Civilitas*からきていて、古代から人間形成の素養や集団生活のためのスキルというニュアンスがあります。文明(Civilization)や市民の(Civic)という言葉も同じ語源からきています。日本は礼節がとても重んじられていますが、果たして丁寧な言葉遣いという以上の意味合いがそこにあるでしょうか。もしその要素が欠けているとすれば、Civilityを保ちながら、どのように自身の意見を伝えたらいいでしょうか。その好例と思われるものとして、パロディやアート要素をもった社会運動があるのではないかという着想で論文「Civility概念の意義：現代日本の社会運動を考えるにあたって」を書きました。

――人々の言説や社会の風潮の変化などはどのように調査するのですか。

こうしたアイディアについて、日本の社会学やメディア学は定量化した分析が多いことは了解しています。私も、こういう論文を面白く拝見します。しかし、この論文において、レトリック研究者、あるいは質的研究者としての私は、新聞報道や政治的な批評のほか、ワイドショーのコメンテーターや街頭インタビューのコメント、SNSでの発言など関連のありそうな文章をなるべく多く収集し、現代日本の公共で礼節が規範としてどう機能しているのかなどを推論しながら論を進めていくというスタイルをとりました。

私が研究テーマを選ぶときに大切にしているのは、組織内の対話や社会での公共的な議論をどのように維持・発展していくことが可能なのか、という観点です。そこから、例えば、Civilityに焦点を当てて、研究を深めています。日本の社会学者は専門分野を明確に決めてから、その範囲内で取り扱うトピックを絞っていく研究者が多いと思いますが、私はコミュニケーションやレトリックに第一の興味があります。したがって、その時々の社会のホットなトピックや、興味をそそるコミュニケーション現象を対象にします。社会運動もアート作品も国会論戦もラップも、硬軟に縛られず、研究テーマを選んでいます。

■他者との対話はいつも異文化コミュニケーション

――外国語学部の異文化コミュニケーションプログラムについてご紹介ください。

コミュニケーションでは、相手が同じ場所で同じ時代に育った人であっても、異なる場所・時代で育った人であっても、程度の差はあっても必ず差異を意識させられます。それは一種の異文化とも言えます。異文化とは、自国と他国の文化の差異を指すだけではなく、性別、人種、年齢、性的指向、価値観、身体的能力等のさまざまな要因が複雑に関わるものなのです。その差異を乗り越えて、一緒に歩む方法を考えるか、あるいは少し距離をとると判断するか。また、距離をとるとしても、その判断を自身が納得できるものにしていくか。時に意見がぶつかることもあるでしょうが、その時にどのように対話を重ねて異なった意見や価値観をすり合わせることが出来るか。このあたりは、若い世代である学生には特に重要な課題だと思います。

外国語学部の学生は2年次にスタディ・アブロードで全員外国での生活を経験します。異文化コミュニケーションプログラムの知見は外国での生活を安全で充実したものにしてくれるでしょう。また、外国生活で得た疑問や課題を、3・4年時に学術的に探究する手法を与えてくれます。そして卒業後には、自分をより良いコミュニケーターにするだけでなく、社会をより良くしていくことにつながりうるものだと信じています。外国語学部での学びを通じて、同胞であっても、外国人であっても、私たち一人ひとりが多層的な文化を生きているという理解で、周囲のものごとやできごとをとらえて、学びを深めていってもらえるとうれしいです。

異文化コミュニケーションの授業で参考にする教科書▶
A few sample intercultural communication textbooks

■Is it possible to argue while respecting civility?

―― What are your recent research topics?

I have long been interested in the aspects of communication that involve the public and numerous stakeholders. Recently, I have been interested in how we can continue dialogues and realize constructive discussions in the face of growing social divisions across different ideologies and cultures. You may want to refuse or give up discussions because it is very hard to keep dialogue with people with different values or backgrounds. However, when it comes to public topics, topics that concern with everyone in the society, we should express our opinions with good reasons and hear opinions open-mindedly and critically. And ideally, we should reach a conclusion that make sense to all of us. As I search communicative practices from a variety of different scenes, I find some that embody this ideal process. But I also find examples that go awfully wrong. When I find either of these cases, I find it interesting to write academic papers.

Civility is an idea that I found interesting to discuss in the scene of social movements in Japan. It is a manner or communication, but it is not just politeness. As you can find from the word, it is enrooted in the virtue of keeping communication in groups. According to the spirit of the term, you show respect to others not because they are superior, but because you believe it is civil, or because it is an expected in the society of civilization. In other words, it is a virtue for civic society. Usually, in Japan, you are expected to be polite in public. But I am not sure if this polite manner is dedicated to keeping dialogue and debate because you believe it best maintains our civil society. In light of that, how do we express our opinions while maintaining civility? So, I wrote a paper titled “Civility: Mannequin Flash Mob, *Jitaku Keibi Tai*, and the Future of Japanese Democracy,” with social movements that make effective use of parody and art serving as good examples to resolve the question I proposed.

―― How do you research your topics?

I understand that sociology and media studies in Japan often adopt quantitative research methods. I also find these papers interesting to read. However, I as a rhetorician and qualitative researcher collect as many relevant texts as possible, including newspaper reports, political critiques, comments from talk show commentators as well as street interviews, and social media posts. Then, I craft my works with ideas and theories of communication, rhetoric or argumentation such as civility.

The choice of my research topics is based on my personal belief that public dialogues and debates should be maintained and developed. The paper on civility and Japanese current social movements is also based on this belief. My speculation is that many researchers in Japan define their areas of specialty from which to choose their individual paper topics. But my primary interest lies in communication and rhetoric, and communication is happening everywhere. So, I target hot topics in society as they occur and compelling communication phenomena. Whether it’s social movements, works of art, debates in the national Diet, or rap, I choose my research themes according to my interest.

■Dialogue with others is always intercultural communication

―― Please introduce us to the Intercultural Communication Program of the Faculty of Foreign Language Studies.

I believe that our communication is always intercultural, whether you interact with someone close to you or someone raised in a very different place and era. This is because culture is not just made by national boundaries. It involves other complex factors, such as gender, race, age, sexual orientation, values, physical ability, and others. In fact, cultures are multi-layered to make up each individual as being one and only. But when we talk with strangers, cultural difference may appear so deep that we sometimes feel that it is impossible to have good, constructive dialogues. When encountering these difficulties, do you consider how to overcome them and walk in unison, or do you decide to keep your distance? And when you decide to keep your distance, how do you justify your decision? When we have conflicting opinions, how can we still keep engaging in dialogue and reconcile these differences? I believe trying to find answers to these questions are very important for all of us, especially those in the younger generations as students.

All students in the Faculty of Foreign Language Studies experience life in foreign countries during their second year through the study-abroad program. The insights they learn from the intercultural communication programs will make their life abroad safer and more meaningful. Moreover, it provides them with foundational academic backgrounds for exploring questions and challenges they have encountered during their life abroad in their 3rd and 4th years. And I believe that after graduation, intercultural communication program will not only make them better communicators but also contribute to improving our whole society. By learning through the Faculty of Foreign Language Studies, I hope students will make use our lessons to maximize their potentials in their life as good college students, good workers and as good citizens.